

上 園 遺 跡 I

福岡県大野城市大字上大利所在遺跡調査概要

大野城市文化財調査報告書

第 18 集

1986

大野城市教育委員会

かみのその
上 園 遺 跡 I

福岡県大野城市大字上大利所在遺跡調査概要

大野城市文化財調査報告書

第 18 集



調査区全景

序

大野城市における埋蔵文化財発掘調査は牛頸の窯跡や、仲島遺跡が大きな比重をしめてきましたが、同時に他の地域でもいくつかの遺跡の調査を行ってきております。上園遺跡のある上大利では、窯跡の調査は行ったことがありますが、平地の集落遺跡は初めてです。詳細は本文を読んでいただきたいと思います。本遺跡は牛頸窯跡群と密接な関係があると考えられます。今回の調査地は遺跡の周辺部に当たっているようですが、今後中心部に調査が及んでいくにつれて、工房跡や集積地跡も検出されるのではないかと期待しているしだいです。

本調査の重要性を認識され、調査費の負担を快諾された共同石油株式会社福岡支店には心から感謝したいと思います。

また、区長を始め協力いただいた地元の皆様や、焼けつくような日差しの中で調査作業に当たられた作業員の皆様にも心からお礼申し上げます。

昭和61年 3 月31日

大野城市教育委員会
教育長 久 野 英 彦

例 言

1. 本書は大野城市教育委員会が共同石油株式会社福岡支店からの受託事業として実施した上園遺跡発掘調査の報告書である。
2. 遺物写真は岡紀久夫が担当した。
3. 遺物実測・製図・拓本は秀嶋和子、井手美智子、河鍋洋子、末永とし子が担当した。
4. 本文挿図の遺物番号は通し番号とし、図版の番号と合わせた。
5. 本書の執筆並びに編集は舟山良一が担当した。
6. 本書に掲載した地形図は建設省国土地理院発行の2.5万分の1地形図『福岡南部』・『不入道』を使用した。

本文目次

I	はじめに	1
II	位置と環境	1
III	調査の結果	5
	1. 調査概要	5
	2. 古墳時代の遺構と遺物	5
	3. 歴史時代の遺構と遺物	14
IV	まとめ	17

図版目次

図版 1	(1)調査地全景
	(2) 1 号住居跡
図版 2	(1) 1 号住居跡遺物出土状態
	(2) 1 号住居跡遺物出土状態
図版 3	(1) S X 02
	(2) S K 02
図版 4	(1) S D 01～S D 04
	(2) S B 01
図版 5	出土遺物(1)
図版 6	出土遺物(2)
図版 7	出土遺物(3)

挿 図 目 次

第1図	上園遺跡と周辺遺跡分布図（1/25,000）	2
第2図	上園遺跡周辺図（1/10,000）	3
第3図	上園遺跡遺構配置図（1/200）	6
第4図	1号住居跡実測図（1/40）	7
第5図	1号住居跡出土遺物実測図（1/3）	8
第6図	S X 01実測図（1/60）	9
第7図	S X 02実測図（1/60）	10
第8図	S X 03実測図（1/60）	11
第9図	土壇出土遺物実測図（1/4）	12
第10図	S D 11・S D 12出土遺物実測図（1/3）	13
第11図	掘立柱建物実測図（1/60）	15
第12図	S K 03実測図（1/40）	16
第13図	S K 03・ピット出土遺物実測図（1/3）	16

I. はじめに

上園遺跡は福岡県大野城市大字上大利に所在する。周囲は民家とアパートが建ち並ぶが、まだ水田、畑も多く残っている一帯である。その一角に共同石油株式会社がガソリンスタンドを建設することとなった。その周辺が遺跡であることは表面の土器散布状況等から充分予測できたのであるが、発掘調査はまだ一度も行われたことがなかった。そのため、市教育委員会としては遺構の有無を知るための試掘調査を行う必要があった。共同石油との協議の上、昭和60年1月に試掘調査を実施した。調査の結果、トレンチにはピットと溝それに比較的大形の落ち込みが検出され、それと共に須恵器片・土師器片が出土し、古墳時代の遺跡であることが判明した。その結果に基づいて共同石油と協議した結果、市教育委員会が共同石油からの受託事業として発掘調査を行うこととなった。調査は昭和60年6月21日より同年8月19日まで行った。最も最初は連日の雨で20日間ほどは何もできなかった。調査体制は以下の通りである。

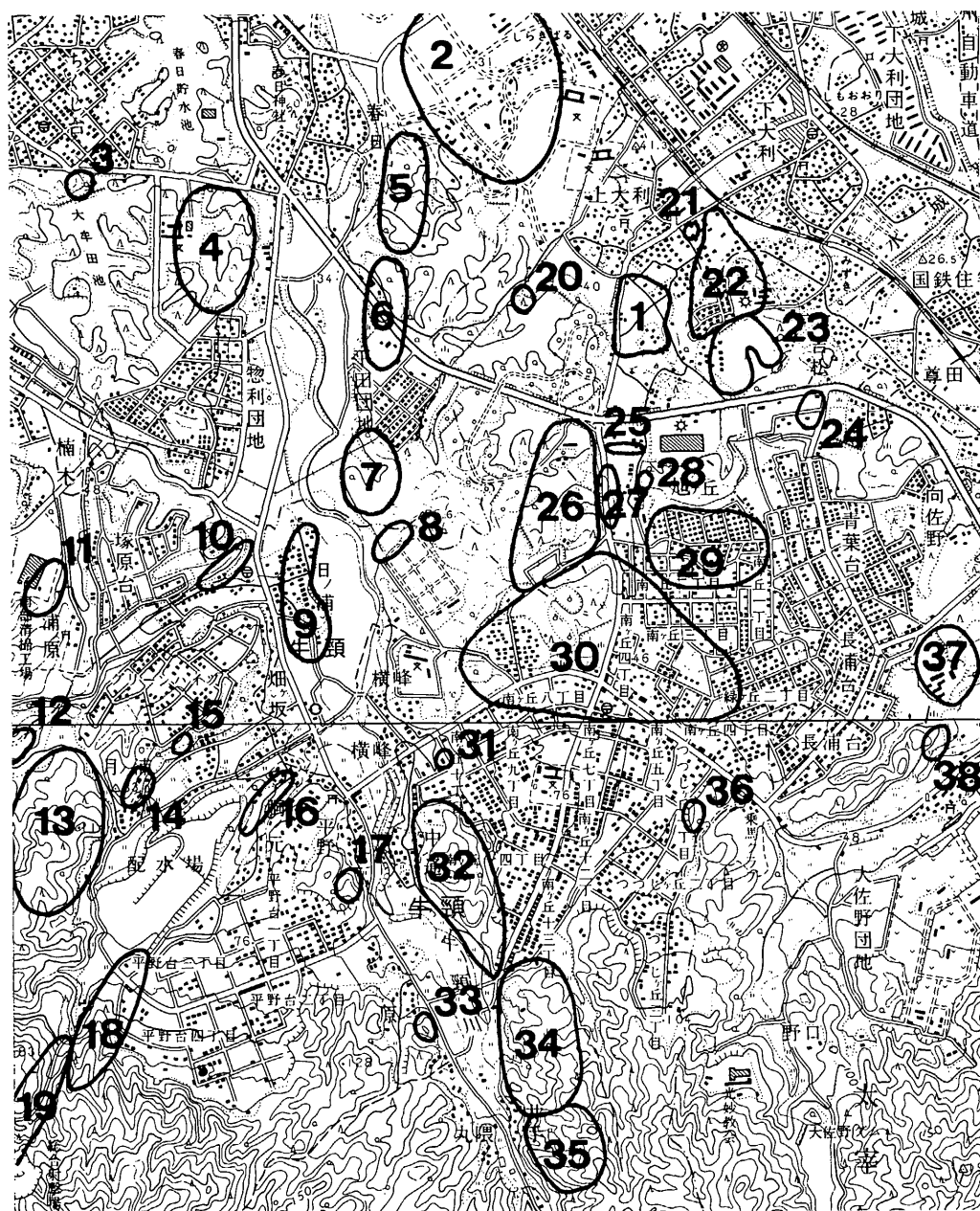
大野城市教育委員会	教育長	久野英彦
同	教育部長	村上信幸
同	社会教育課長	船越美直
同	社会教育係長	安恒巧高
同	社会教育文化財担当	高橋裕司
同	社会教育調査技師	舟山良一
同	同	向直也
同	整理補助員	秀嶋和子

調査に際しては上大利区長を始め地元の方々のご協力を得た。また、遺物整理に関しては、太宰府市教育委員会山本信夫氏他の方々にお世話になった。厚く感謝の意を表したい。また、酷暑の中連日調査に携って頂いた作業員の皆様にも心から感謝したい。

II. 位置と環境

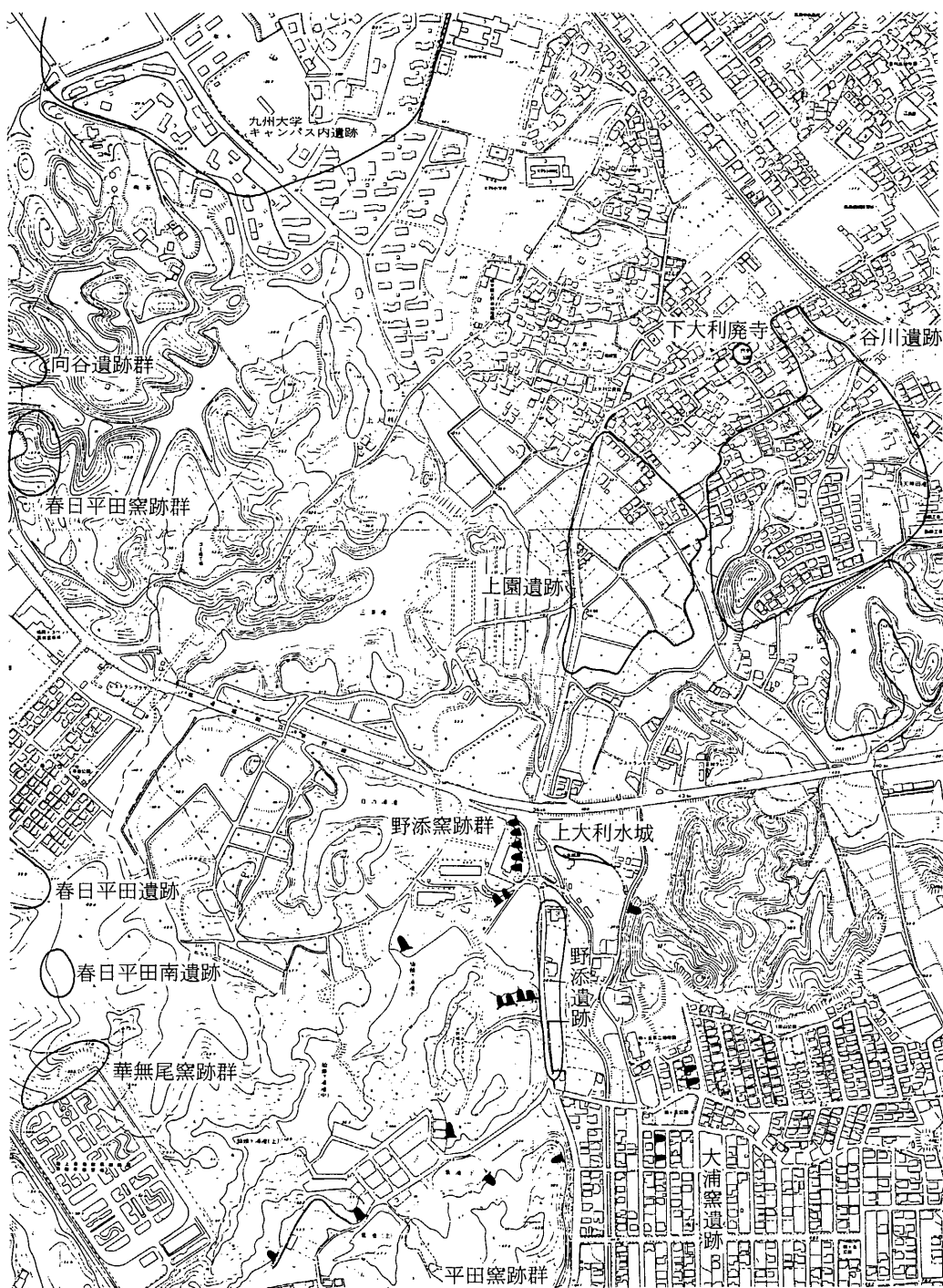
上園遺跡は大野城市大字上大利に所在する遺跡であるが、1980年福岡県教育委員会発行の『福岡県遺跡等分布地図』には掲載されていない。そこに記されている本堂遺跡(190135)、横堤遺跡(190136)、谷川遺跡(190132)に囲まれた部分が上園遺跡である。また、大野城市文化財調査報告書第9集『牛頸中通遺跡群II』1982で上大利日ノ浦遺跡としたものであるが、調査地周辺の小字名が上園であることから、今後は上園遺跡と呼んでいくことにした。

上園遺跡は、牛頸山から北に派生し、既に平野部に近い丘陵に挟まれた谷部に存在する。小



第1図 上園遺跡の位置と周辺遺跡分布図 (1/25,000)

- | | | | |
|------------|---------------------|------------|------------|
| 1. 上園遺跡 | 2. 九州大学
キャンパス内遺跡 | 3. 大牟田池窯跡 | 4. 惣利遺跡群 |
| 5. 向谷遺跡群 | 6. 春日平田窯跡群 | 7. 春日平田遺跡群 | 8. 華無尾窯跡群 |
| 9. 日ノ浦遺跡 | 10. 塚原古墳群 | 11. 浦ノ原窯跡群 | 12. 後田窯跡群 |
| 13. 小田浦窯跡群 | 14. 月ノ浦窯跡 | 15. 月ノ浦古墳 | 16. 畑ヶ坂窯跡群 |
| 17. 城の山窯跡群 | 18. 大谷窯跡群 | 19. 石坂窯跡群 | 20. 梅頭窯跡 |
| 21. 下大利廃寺 | 22. 谷川遺跡 | 23. 矢倉遺跡 | 24. 神の前窯跡群 |
| 25. 上大利水城 | 26. 野添窯跡群 | 27. 野添遺跡 | 28. 谷蟹窯跡 |
| 29. 大浦窯跡群 | 30. 平田窯跡群 | 31. 東浦窯跡群 | 32. 中通遺跡群 |
| 33. 原窯跡群 | 34. ハセムシ窯跡群 | 35. 井手窯跡群 | 36. 上平田窯跡群 |
| 37. 宮ノ本遺跡 | 38. カヤノ遺跡 | | |



第2図 上園遺跡周辺図 (1/10,000)

さいながらも平田川が遺跡の東側を北流し、遺跡はその河岸段丘の上にある。遺構面は砂質土又はシルト層上面となるが、その下層は砂層・粘質土層が互層をなす。

さて、前述したように遺構が確認されたのは昭和60年のことであるが、表採資料は以前から知られていた。須恵器では前記報告書で紹介した竈がある。陶邑のTK208期からTK23期のものと思われるものである。また奈良時代に属する軒丸瓦も採集されている。^{<註1>}上園遺跡ではないが、遺跡のすぐ南西で陶質土器も表採されている。^{<註2>}

上園遺跡は後述するように主に古墳時代後期の集落遺跡であるが、時代背景を考える場合最も重要なことは背後にひろがる牛頸窯跡群との関連である。既に知られているように、牛頸窯跡群は野添6号窯跡が最も古いもので、出土須恵器はⅢA期のものである。その後奈良時代後半までの約250～300年間に数多くの窯を築いている。調査されたものだけでも150基ほどになり、総数では300とも500ともいわれている。上園遺跡の今回の調査ではⅢA期の竪穴住居跡が調査されたが、表採資料にはそれ以前の須恵器もあるため、牛頸窯跡群との関連についてまだ明確なことを言える状況ではないが、集落の開始時期とⅢA期の状況は今後の調査に際し、最も留意しなければならない点である。

隣接する春日市と太宰府市の一部を含む牛頸窯跡群であるが、前述したように窯跡の発掘調査は150基ほどになり、また古墳の調査も中通古墳群、^{<註4>}後田古墳群などいくつか行われている。^{<註5>}それに対して少なくとも大野城市では集落跡の調査はなされていなかった。候補地としてはこの上園遺跡と日ノ浦遺跡（第1図9）が上げられていただけである。しかし、春日市においては土地区画整理事業に伴って牛頸川中流域の多くの遺跡が調査されている。それによれば牛頸川兩岸の丘陵部を中心に弥生時代から遺跡のあることが知られるようになった。^{<註5>}また古墳時代になっても前期～中期にかけての古墳・集落の存在が判明している。従って、春日地区においては牛頸窯跡群の形成以前から連綿とした歴史のあることがわかる。更に惣利遺跡、惣利西遺跡（第1図4）では狭小な尾根や急斜面に6世紀後半頃の集落が営まれており、出土遺物中圧倒的に須恵器が多いことなど、牛頸の須恵器生産と密接に関連したものと推測されている。しかし、円入遺跡等^{<註6>}でⅢA期の住居跡が検出されているが、同地区にⅢA期の窯跡は知られていない。春日地区とは谷を異にする上園遺跡周辺では現在のところ、弥生時代の遺跡は知られていない。一方、牛頸窯跡群中現在最古の窯跡として知られている野添6号窯跡は、上園遺跡と同じ谷の南約300mに位置していた。現在知られている牛頸窯跡群と、それに関連すると思われる集落跡の状況を簡単に述べれば以上である。

他に周辺で注目される遺跡としては、窯跡と買地券で知られる宮ノ本遺跡^{<註7>}（第1図37）は上園遺跡の南東1.5kmに位置する。また、上大利水城（第1図25）は遺跡の南300mに位置する。野添6号窯のあった斜面の東の谷部に当たる。

- 註1. 赤崎敏男氏のご教示による
註2. 茂和敏・佐藤昭則「福岡県牛頸表採陶質土器の紹介」『地域相研究』第9号、地域相研究会、1980
註3. 小田富士雄・柳田康雄編『野添・大浦窯跡群』福岡県教育委員会 1970
註4. 『牛頸中通遺跡群』Ⅰ・Ⅱ 大野城市教育委員会 1980、1982
註5. 『春日地区遺跡群』Ⅰ～Ⅲ 春日市教育委員会 1982、1983、1985、他に春日市教育委員会丸山康晴・平田定幸氏のご教示による
註6. 平田定幸氏のご教示による
註7. 『宮ノ本遺跡』太宰府市教育委員会 1980

Ⅲ. 調査の結果

1. 調査概要

今回調査された遺構は古墳時代後期と平安時代に属するものである。前者に属するものとして方形竪穴住居跡1、不整土壇3、須恵器大甕を据えた土壇2、中小の溝である。平安時代に属するものとしては井戸と思われる土壇1、掘立柱建物1、そしてピット群である。調査地の西側は丘陵であるが、遺構は溝を除いて東側に多い。丘陵からやや間隔を置いて集落が営まれていることになる。竪穴住居跡も完全な形で検出されず一部がかかっただけである。遺跡の中心部は調査地の東側に広がるものと思われる。遺物は流れ込みと思われる石包丁を除いては土器だけである。土師器は少なく須恵器が圧倒的に多い。遺跡の性格を考える場合問題にしなければならないことである。

調査区の層位は水田耕作土、床土、暗褐色又は灰褐色砂質土層と続き、その下が遺構検出面となる。遺構面は茶色又は淡褐色砂質土、褐灰色シルト、褐灰色粘質土が露出していて一様ではない。現水田面より遺構検出面まで約50cmで浅い。

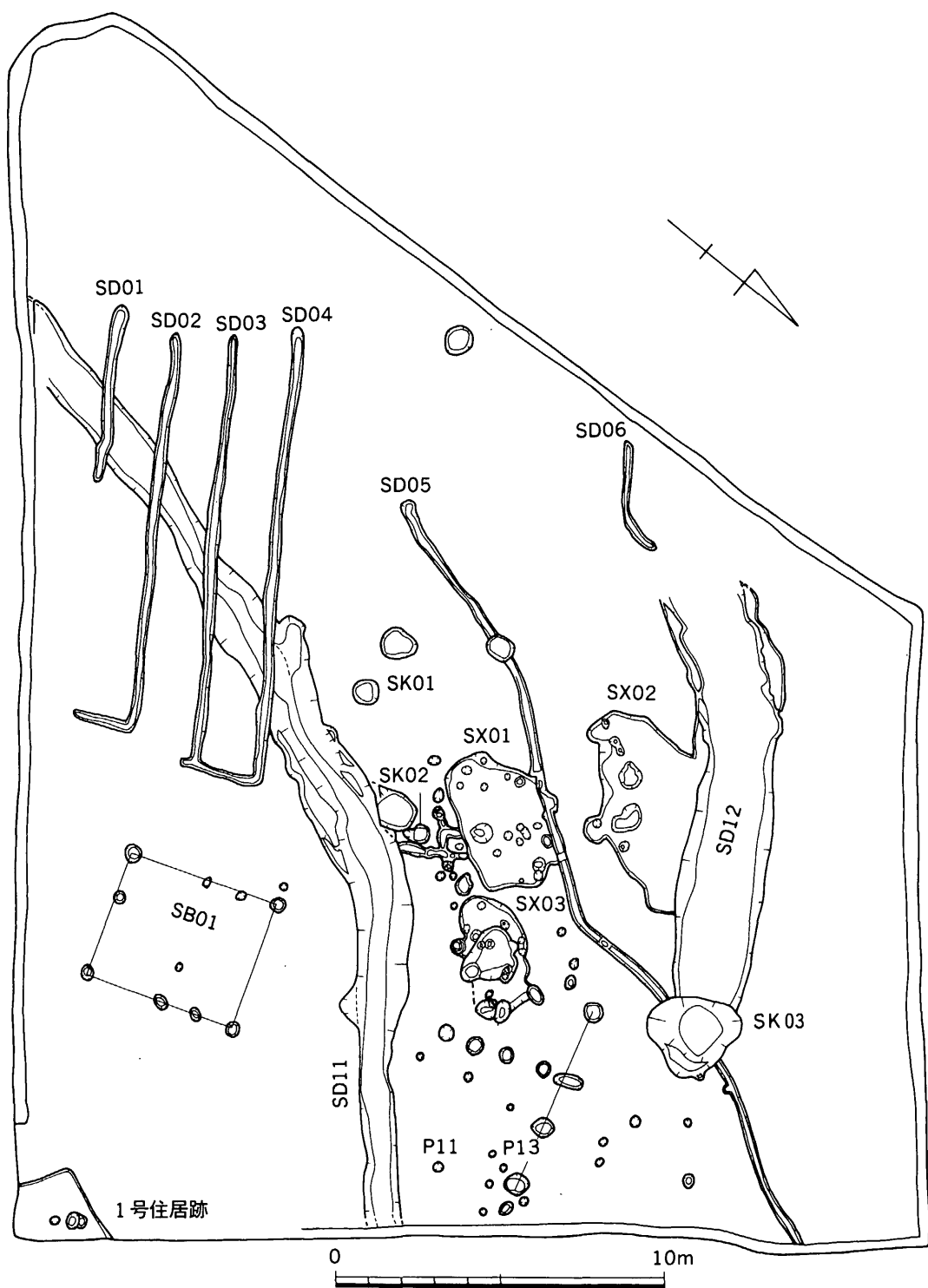
2. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 竪 穴 住 居 跡

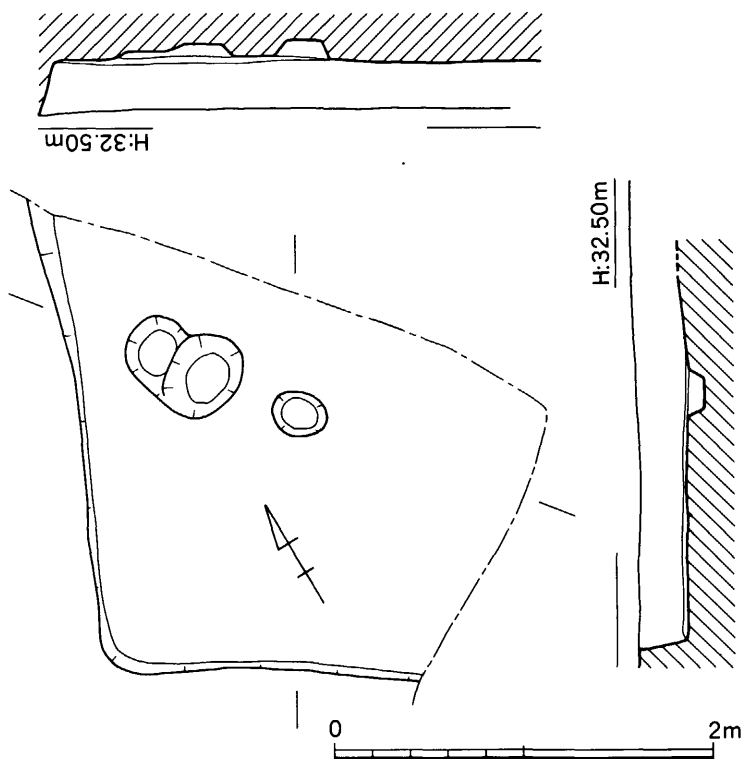
1号住居跡（第4図、図版1-(2)）

調査区東の隅で検出されたものであるが、方形住居跡の1コーナーが調査できただけである。検出できた規模は2.0×2.5mである。検出面から床面までの深さは約25cmである。床面は砂質土で固くはない。ピットは3個検出できたが、床面からの深さが10cmにも満たないもので柱穴としては疑問がある。検出された分にはカマドはなかった。

遺物は比較的多く出土した。特に集中している場所はなく、位置、深さともにまちまちであ



第3図 上園遺跡遺構配置図 (1/200)



第4図 1号住居跡実測図 (1/40)

る。しかし、埋土内の深さによって時期の変わることはない。特徴的なのは出土土器のほとんどが須恵器であることである。また、焼成時に熱のため変形したものも含まれている。

出土遺物 (第5図、図版5～6)

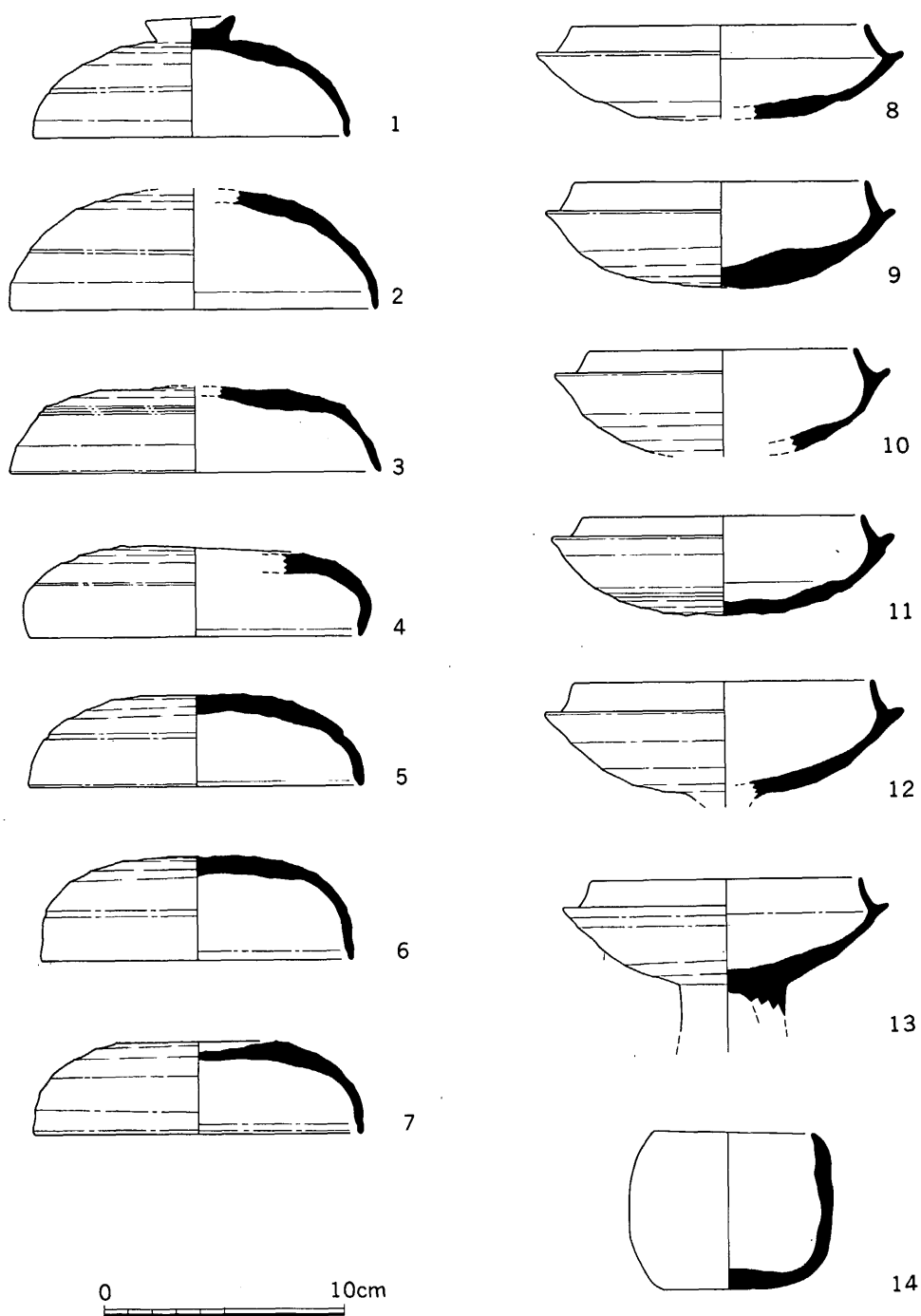
蓋 (1) つまみが付き、天井部と体部の境に沈線を持つ。天井部のヘラケズリはていねいである。天井部内面に叩きの跡がある。

杯蓋 (2～7) 6・7がやや不明確であるが、すべて天井部と体部の境に沈線を持つ。また、天井部内面には叩きの痕跡がある。ヘラケズリはていねいである。2の復元口径15.4cm、7の口径13.8cmである。

杯身 (8～11) 立ち上がり高がそれぞれ1.1cm、1.2cm、0.9cm、0.8cmである。10は破片のため不明だが、その他はすべて底部内面に叩きの痕跡がある。

高杯 (12・13) いずれも有蓋高杯で、12は杯身同様天井部内面に叩きの痕跡がある。

その他 (14) 14はロクロを使っていない。手づくね土器を窯で焼成した感じである。



第5図 1号住居跡出土遺物実測図 (1/3)

(2) 不 整 土 壇

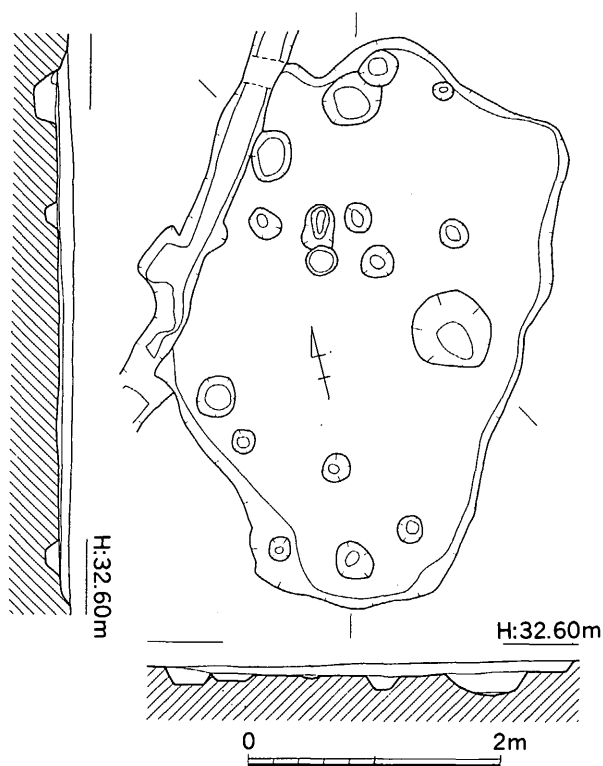
調査区中央部で検出されたもので、平面形、断面とも整わないものである。

S X 01 (第 6 図)

ゆがんだ長形状を呈する。西側はS D 05と切り合う。最大で約4.0m×2.8mの規模である。床面は南半分がやや平坦であるが、北側は少し深い。深さは南側で約10cm、北側で15cmほどである。大小17個のピットがあるが、床面から10cm以内の深さである。出土遺物は少ない。

出土遺物

須恵器甕片少量と、ピットから杯身小破片が出土したが、小片のため図示しなかった。杯身は立ち上がり高が1.5cm、口唇部内面にやや段を残すものである。III期に属するものであろう。



第 6 図 SX01実測図 (1/60)

S X 02 (第 7 図)

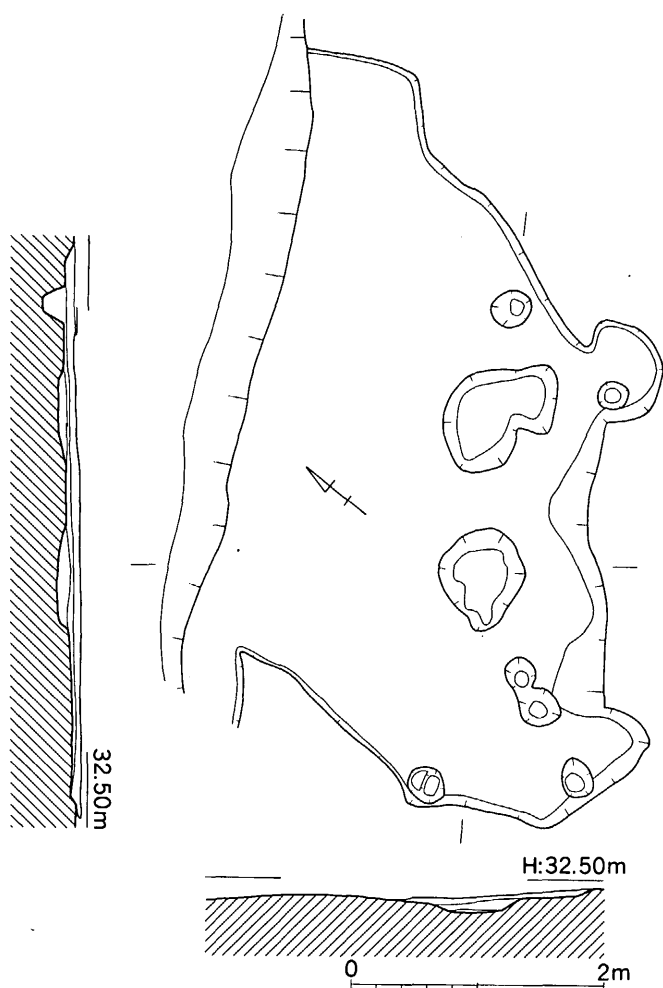
S X 01のすぐ西で検出されたもので、平行四辺形状を呈する。約4m×3mの規模である。床面は平坦でない。大小9個のピットがあるが、いずれも深さ10cm内外のものである。出土遺物は少ない。

出土遺物

少ないが、須恵器片と土師器片が半々ずつである。少片ではあるが弥生式土器と思われるものも含まれている。杯身の立ち上がりはS X 01出土の杯に比べて低く、1.0～1.3cmほどである。杯蓋破片を見ると肩部に痕跡的な沈線と端部内面に沈線を持つ。

S X 03 (第 8 図)

S X 01のすぐ北東で検出されたものである。最大で3.9m×2.3mの規模である。中央部が更に下がる。大小多くのピットがあるが、ほとんどは浅い。一番深いもので床面から約30cmである。



第7図 SX02実測図 (1/60)

ややくぼむがほとんど平坦である。中から須恵器の甕の破片が重なった状態で出土した。

出土遺物 (第9図、16)

口頸部と底部を欠く。残存高37cm、胴部最大径43cmを測る。外面は平行叩き、内面は同心円文叩きを施す。焼成良好で淡青灰色を呈する。

S K 02 (図版3-(2))

S K 01の北4.5mに位置し、やや角ばった円形を呈する。54cm×50cm、深さ8cmと浅い。上半部はかなり破壊されているが、下半部はほぼ残る須恵器甕が据えたような形で出土した。

S X 01、S X 02が不整形とは言え長方形、平行四辺形状を呈するに対し、S X 03はより複雑な形をしている。出土遺物は少ない。

出土遺物

少片のため図示しなかった。須恵器片1と土師器片2である。須恵器は杯蓋で肩部に沈線を有し、ヘラケズリの範囲も広い。口唇部内面にも沈線がめぐる。III A 期に属する。

(3) 土 坑

小規模なものであるが、ほぼ円形を呈し、中に須恵器の甕を入れたものである。

S K 01

発掘区中央やや南よりで検出されたもので、ほぼ円形を呈する。直径は約0.8m、深さ30cmである。底面は中央部が

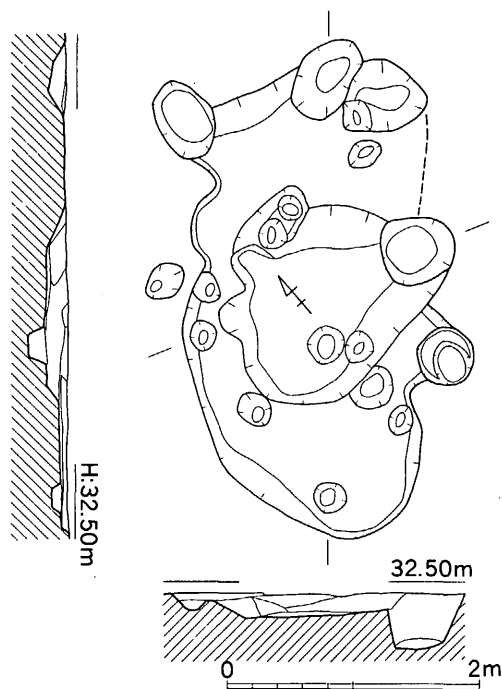
出土遺物（第9図、15）

全体の3分の2が残る甕である。復元口径25.7cm、胴部最大径41.3cm、器高45.4cmを測る。口頸部内外はヨコナデ、胴部外面は平行叩き、内面は同心円文叩きを施す。焼成良好で暗青灰色、淡青灰色を呈する。

(4) 溝 状 遺 構

小溝

幅30cmほどの溝状遺構が6条検出された。調査区南部で検出されたSD01～SD04は約1.6m間隔でほぼ平行に並ぶ。それぞれが東端で鍵形に曲がる。深さは深くても10cm内外である。SD05は調査区中央部を蛇行しながら貫いている。幅約30cm、深さ約10cmである。出土遺物は少ない。



第8図 SX03実測図 (1/60)

出土遺物

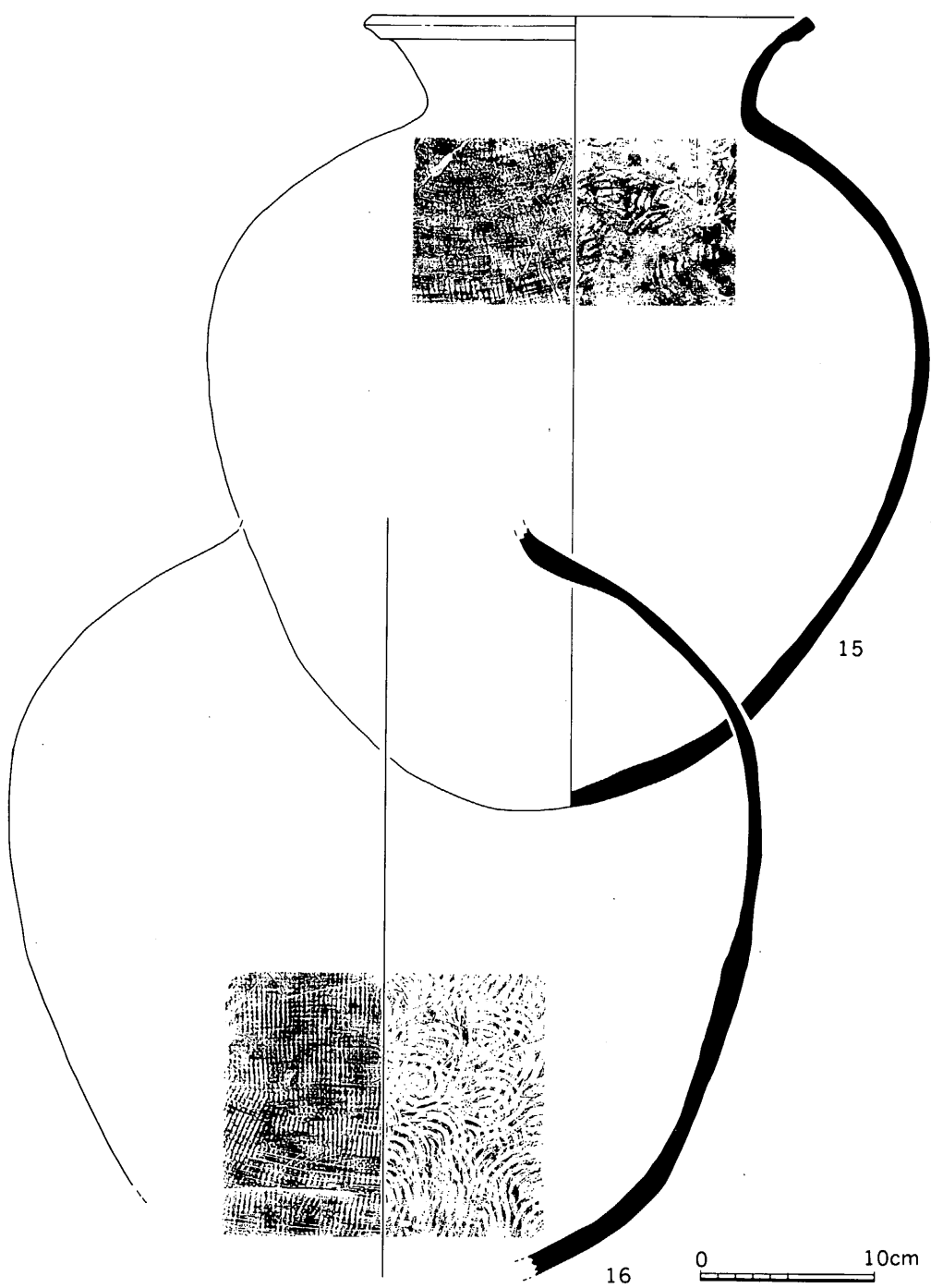
須恵器と土師器が少量出土した。須恵器がほとんどである。甕片が多いが、杯の破片はSD03、04、05で出土していて、III～IV期に属するものと思われる。

SD11

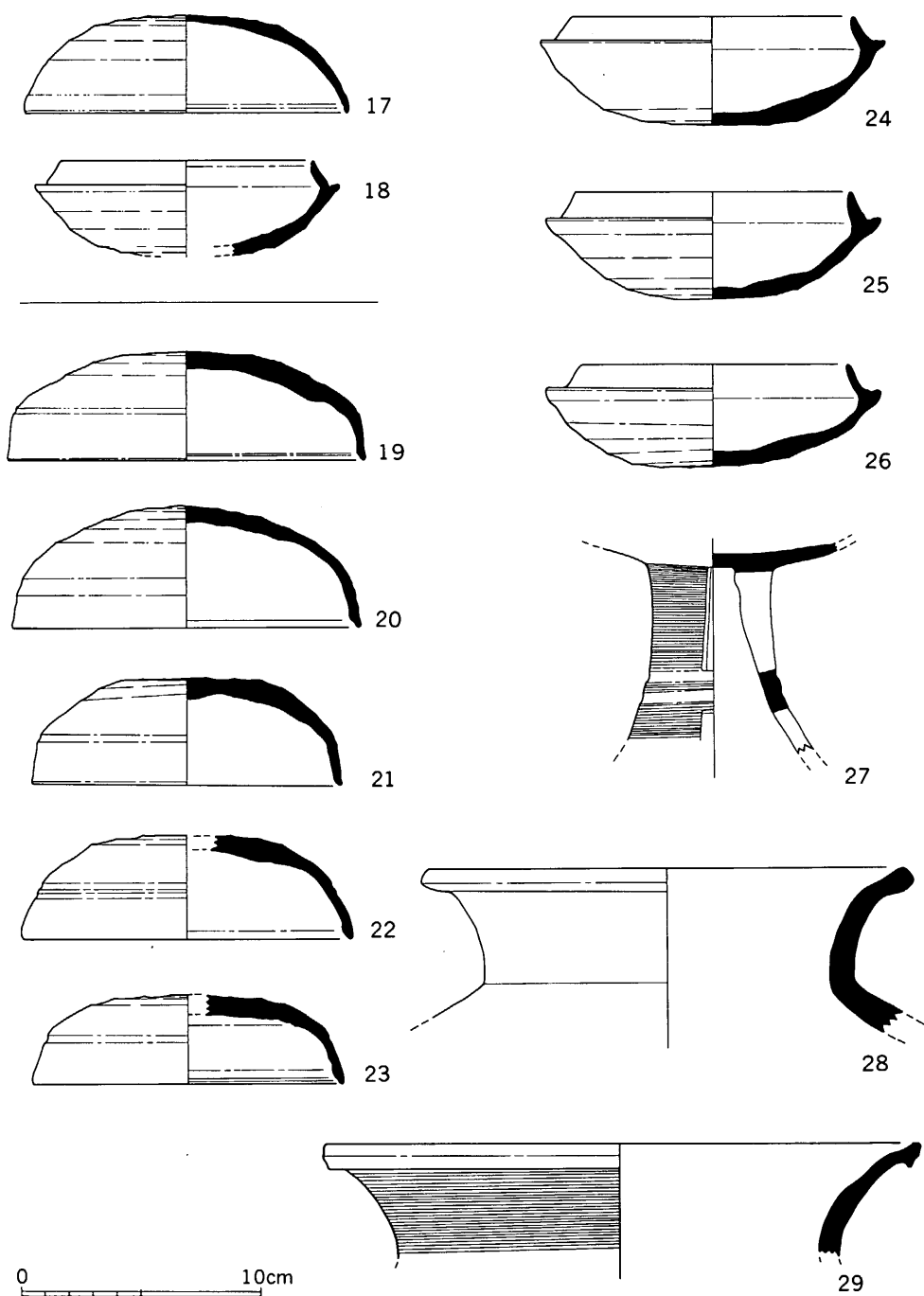
調査区を南北に貫流するものである。幅1.4～1.8m、深さ約50cmである。SD01～SD04より古い。底、側面ともに砂質土で、埋土はやや粘質土である。概して北側が低い。現代の河川も南から北に流れているので、流れの方向は同一と思われる。出土遺物は整理箱1箱分ぐらいである。

出土遺物（第10図、17・18）

須恵器と土師器がほぼ1対1の割合で出土している。17は復元口径13.6cm、器高4.1cmを測る。天井部2分の1強をヘラケズリする。18は復元値で受部径14.1cm、口径11.5cm、器高4.5cmを測り、底部のほぼ半分をヘラケズリしている。底部内面に叩きの痕跡が残る。IIIB期に属するものと考えられる。



第9図 土壇出土遺物実測図 (1/4)



第10図 SD11・SD12出土遺物実測図 (1/3)

S D 12

調査区の北側を南西―北東方向に走るものである。上端幅2.0～2.6m、深さ40～50cmで、概して北東側が低い。S D 11と同様南側から北側へ流れていたものと思われる。後述するS K 03に切られるが、その部分より東側はS D 05やピットがあるため掘らなかった。出土遺物は整理箱1箱分ぐらいである。

出土遺物（第10図、19～29）

須恵器がほとんどで、その内甕の破片が3分の2である。

杯蓋（19～23） 20がわかりにくい、天井部と体部の境に沈線を持つ。また、20・22はそれほどわからないが、口縁端部内面に段又は沈線を持つ。20の天井部内面には叩きの痕跡がある。20・23の外面のヘラケズリは比較的ていねいである。

杯身（24～26） 立ち上がり高はそれぞれ1.0cm、1.1cm、1.1cmで、受部径は14.5cm、14.1cm（復元値）、14.0cmである。底部外面のヘラケズリは比較的ていねいで、24・25の底部内面には叩きの痕跡がある。

脚部（27） 外面にカキ目がある。杯部内面には杯身と同様に叩きの痕跡がある。

甕（28・29） 口縁部だけであるが、29はカキ目をめぐらしている。

3. 歴史時代の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

S B 01（第11図）

調査地東側で検出されたものである。3間×2間で、桁行4.8m、梁行4.0mである。柱穴は深いもので51.5cm、浅いもので9cmである。出土遺物はない。

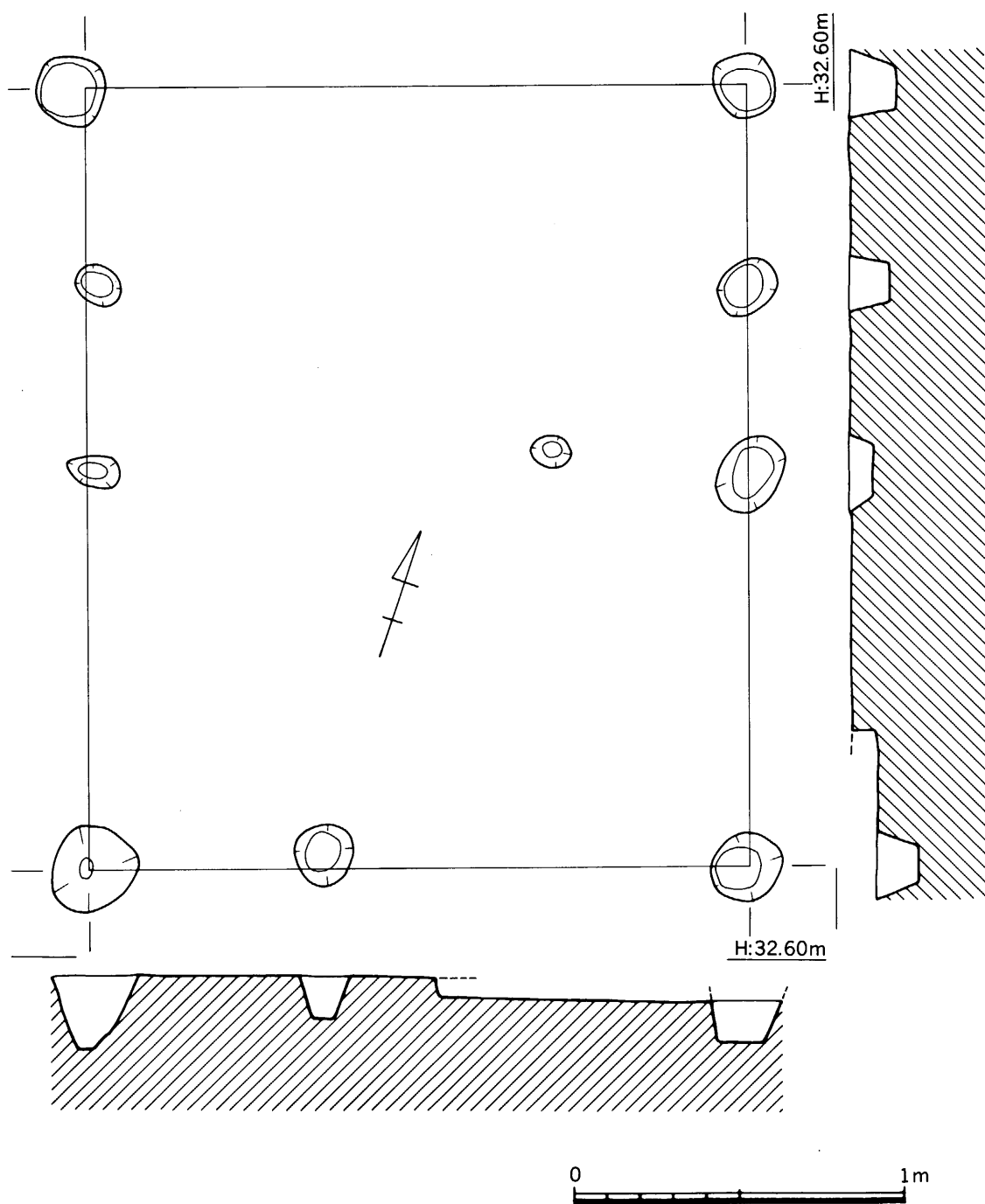
(2) 土 壇

S K 03（第12図）

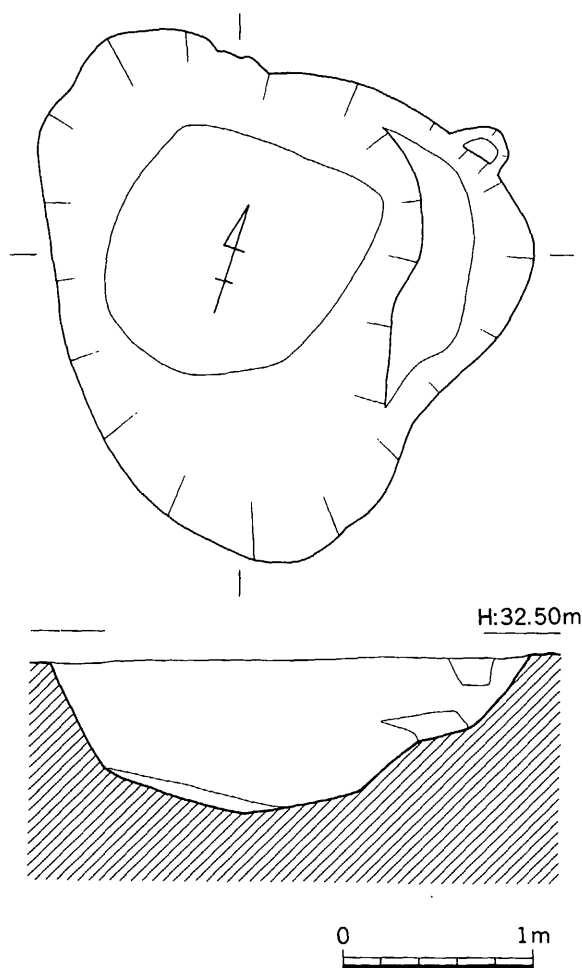
調査地北側で検出されたものである。不整円形を呈し、約2.5m×2.6m、深さ約0.8mである。東側に段を持つ。断面はゆるやかなすり鉢状を呈する。砂質土に掘り込まれているため、極めて崩れやすい。また湧水も激しい。内部施設は見当たらなかったが井戸の可能性を考えている。

出土遺物（第13図、30・31）

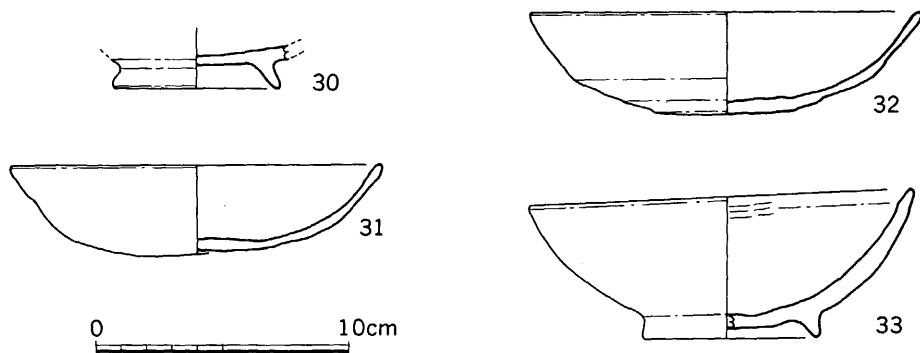
土師器と須恵器が出土したが多くはない。須恵器は古墳時代のもので、流れ込みと思われる。30は碗の底部でナデている。31は皿であるが、体部と底部の境は明瞭ではない。内外面をミガ



第11図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)



第12図 SK03実測図 (1/40)



第13図 SK03・ビット出土遺物実測図 (1/3)

いている。口径14.8cm、器高3.5cmである。

(3) その他の遺物

(第13図、32・33)

P₁₁、P₁₃より土師器と黒色土器が出土している。32はP₁₃より出土したもので口径15.5cm、器高4.1cmを測る。器壁が荒れているため調整はわかりにくい、内面はミガいているようだ。底部には板状圧痕がある。33はP₁₁より出土した黒色土器で口径15.1cm、器高5.7cmを測る。内面口縁部付近はミガキ、その他はナデているようだ。初期の瓦器の可能性もある。＜註1＞

註1 九州歴史資料館森田勉氏、太宰府市教育委員会山本信夫氏のご教示による。

IV ま と め

調査の結果を簡単にまとめてみたい。

1 古墳時代の遺構

(1) 竪穴住居跡

1軒検出されたにすぎないが、今回の調査地より東側に多く存在するものと思われる。ⅢA期の所産である。

(2) 不整土壇

不整形ではあるが、ゆがんだ長方形あるいはひし形状を呈するもの（S X 01、S X 02）と完全に形のなさないもの（S X 03）の2種類ある。床面も窪みが多く全体に浅い。遺物の出土も少なく、用途については不明である。遺物が少破片なため詳細については明らかにすることはできないが、ⅢA期、遅れてもⅢB期に属すると思われる。

(3) 土 壇

中甕の検出されたもので、S K 01は破片の重なりとして、S K 02は据えた形で出土した。出土状態に違いがあるため、同一に論じることはできないかも知れないが、一括して土壇としてとりあげた。

(4) 溝状遺構

中規模なもの（S D 11、S D 12）と小規模なものが見られるが、後者は更に直線的なもの（S D 01～04）と蛇行するもの（S D 05、S D 06）に分けられる。S D 11、S D 12は断面などから人為的なものとは考えにくいものである。S D 01～04は直線的で人工のものと思われる。耕作に関連するものではないかと考えたが、詳細は不明である。S D 11、S D 12はⅢA期に属するものと思われる。他の小溝も出土遺物は少ないが、ほぼ同一時期と思われる。

2 歴史時代の遺構

(1) 土 壇

内部の施設が検出されなかったため断定できないが、井戸の可能性を考えたものである。出土遺物から11世紀後半～12世紀前半のものと思われる。

(2) 掘立柱建物

柱穴の並び方に問題があると思われる。精査につとめたが、他に柱穴は検出できなかった。時期については決定的な出土遺物がないため断定できないが、調査地全体の出土遺物が6世紀代以外のものは11世紀後半～12世紀前半のものなのでその時期のものと考えられる。

住居跡の検出状況から、今回の調査地は遺跡の周辺部に当たることが予想される。

遺物の面では、古墳時代のものは須恵器が圧倒的に多く、土師器が少ない。須恵器窯跡群と密接な関連を持つことが推測できる。時期について見れば、ⅢA期のものが多く出土している。現在、牛頸窯跡群中最古のものとされる野添6号窯跡と同一時期のため極めて注目される。周辺の表採遺物にはそれより古いものが含まれているため、集落の形成時期についてはまだ断定できないが、今後も調査の問題点としなければならない。

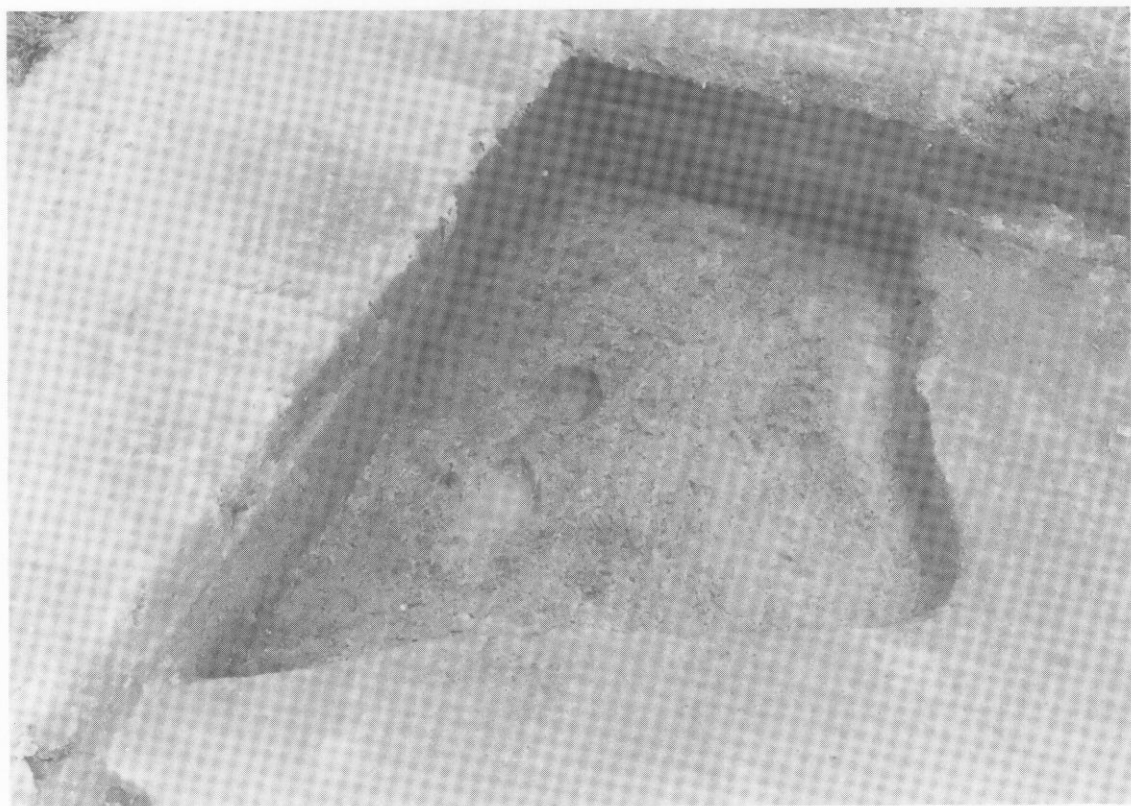
最後に調査に協力いただいた方々のお名前を記して感謝の意を表したい。

赤星年子、浅川郷子、伊藤和子、梶原三治、篠原東美子、田島幸子、富樫孝志、中島和子、中村淳子、原田敬子、福永志津子、森山美代子、湯川玲子、横川浩、吉嗣波津子、宮崎美智子

圖 版



(1) 調査地全景



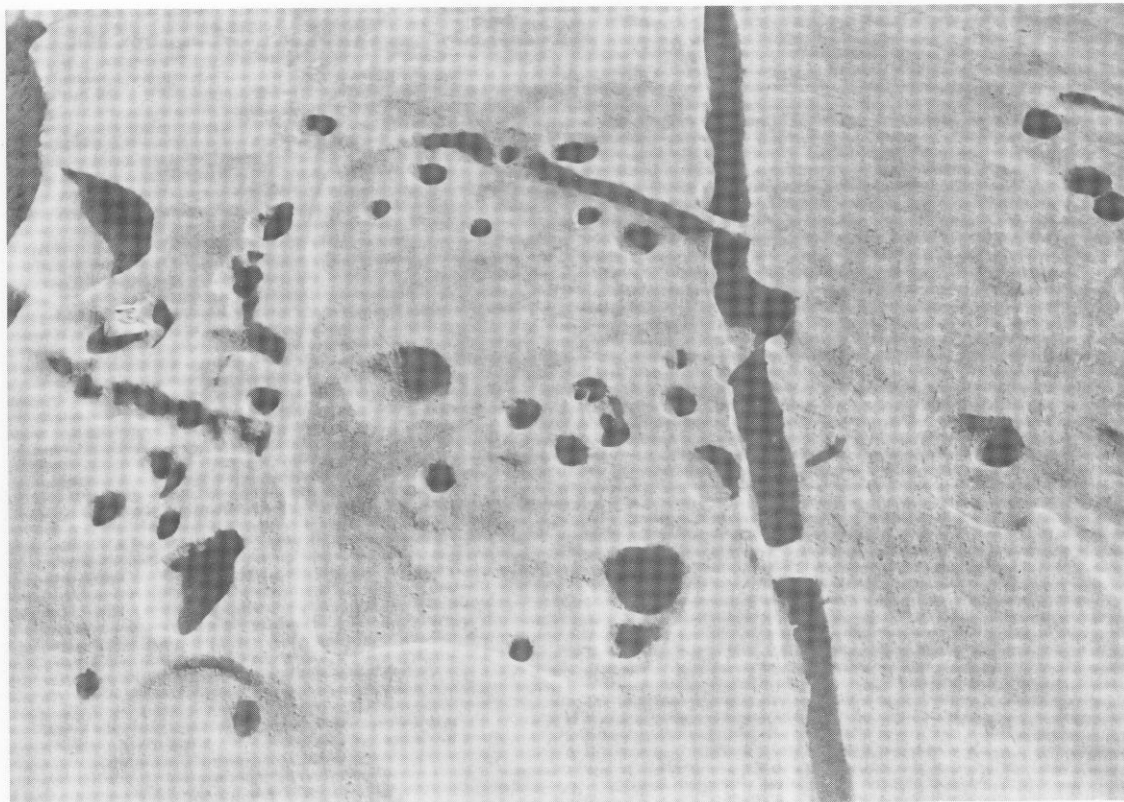
(2) 1号住居跡



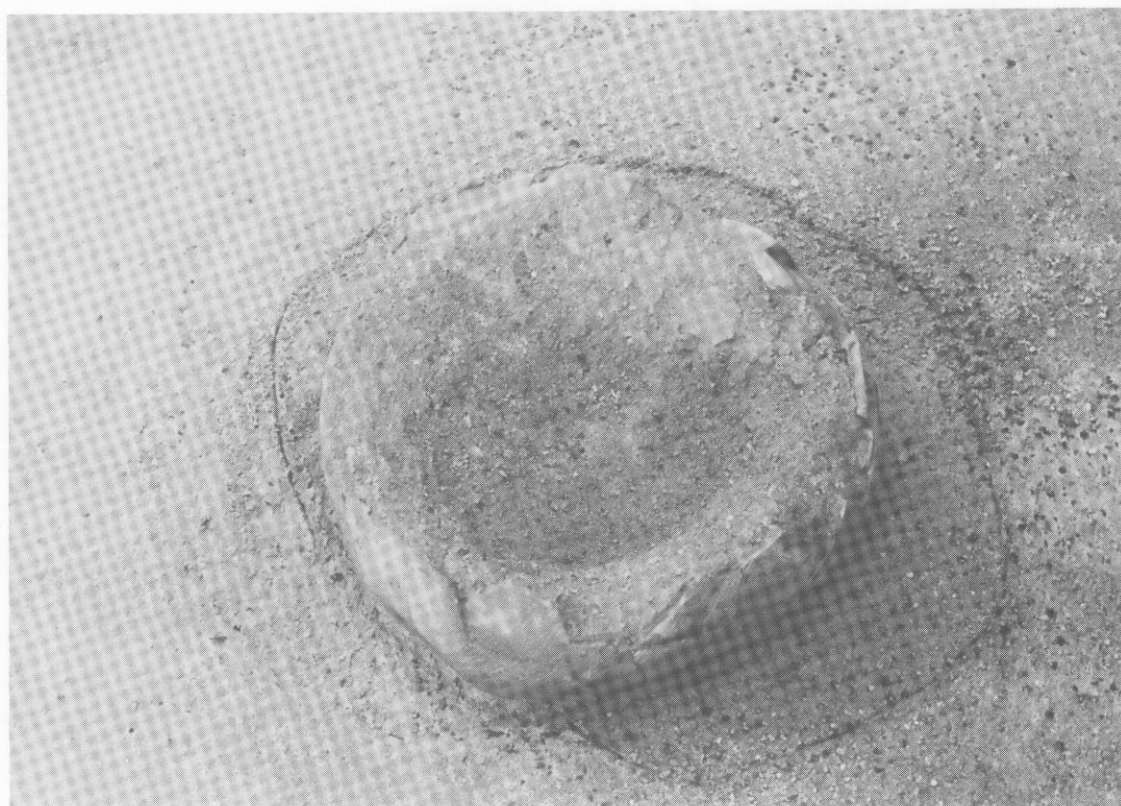
(1) 1号住居跡遺物出土状態



(2) 1号住居跡遺物出土状態



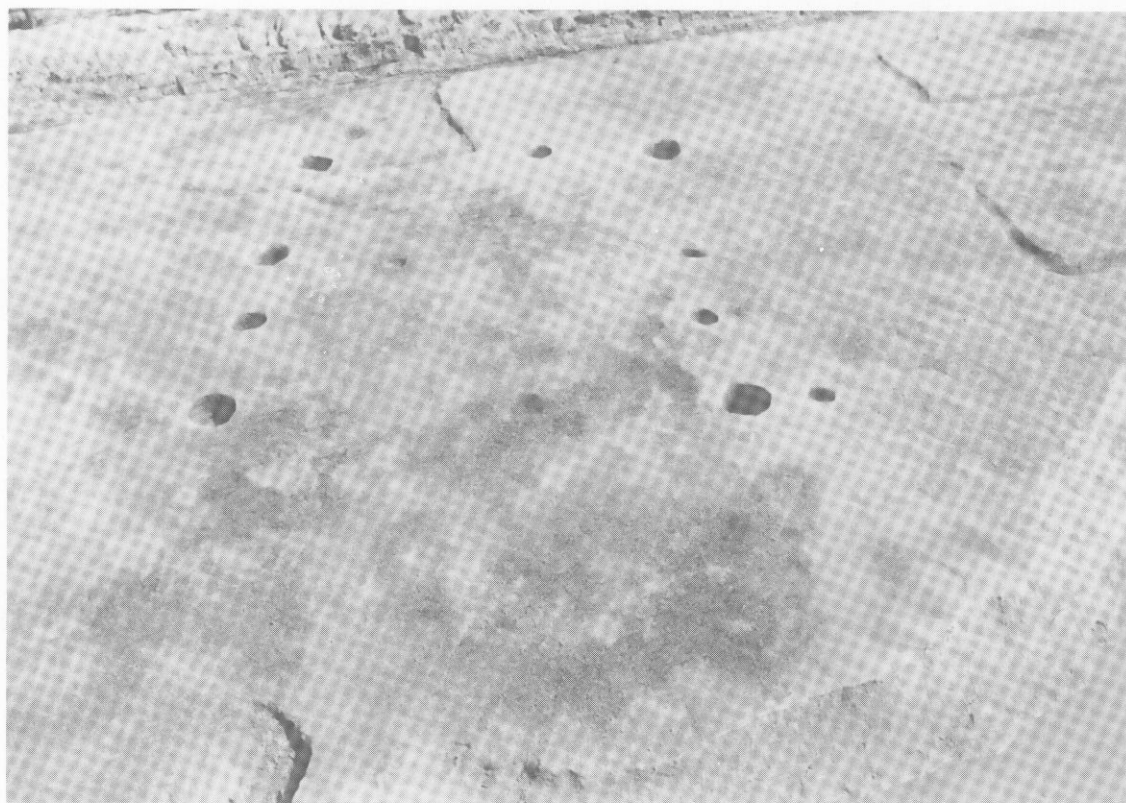
(1) SX02



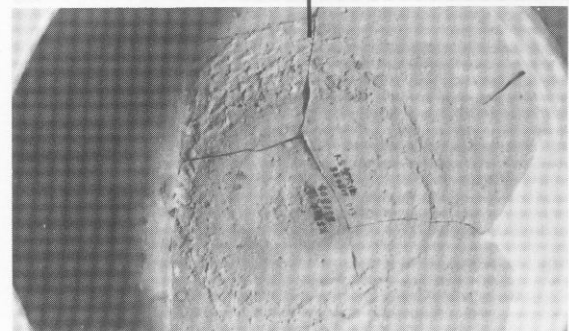
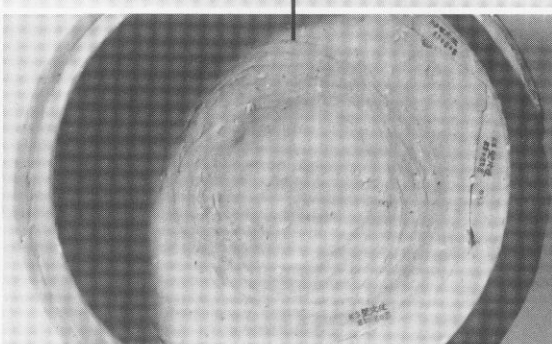
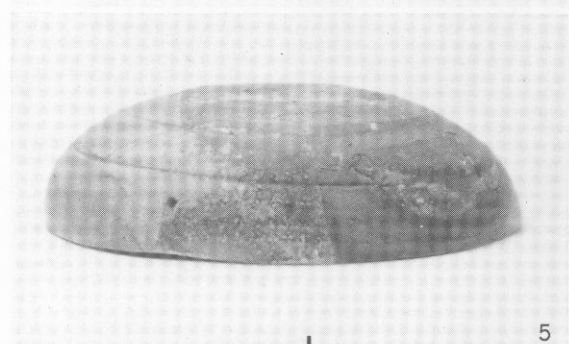
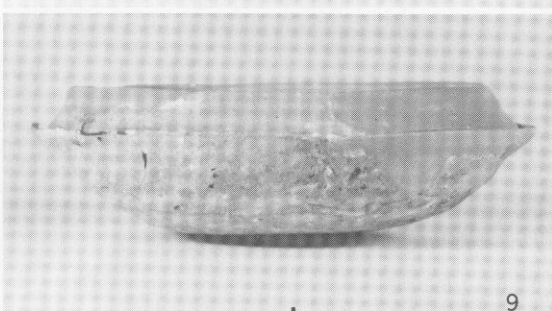
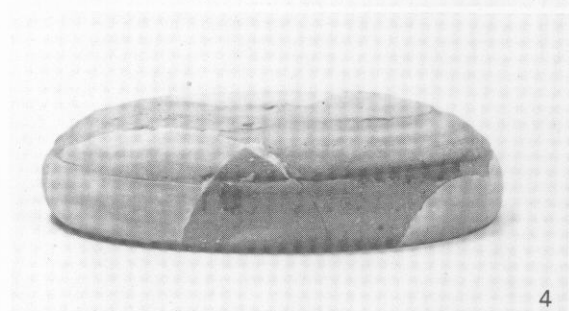
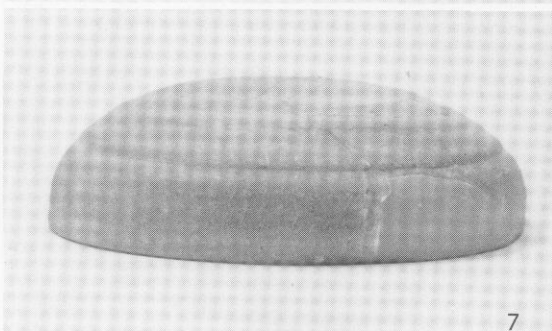
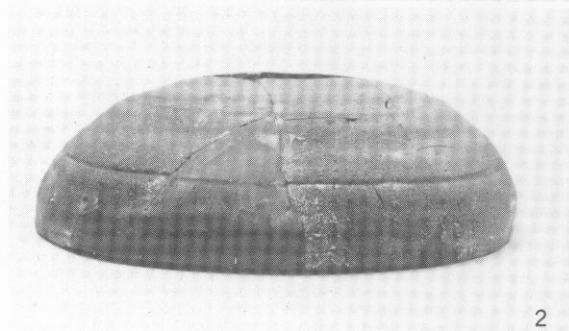
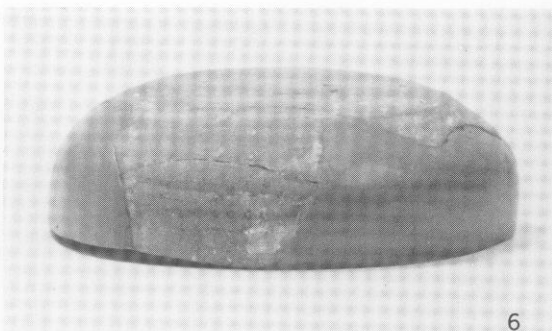
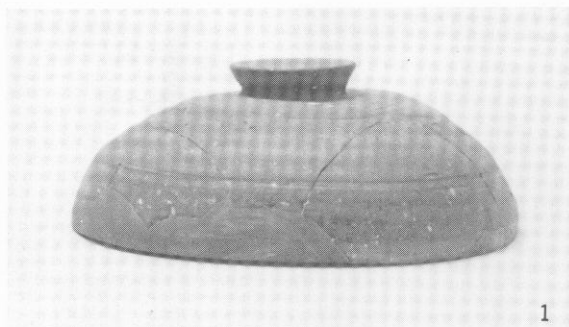
(2) SK02

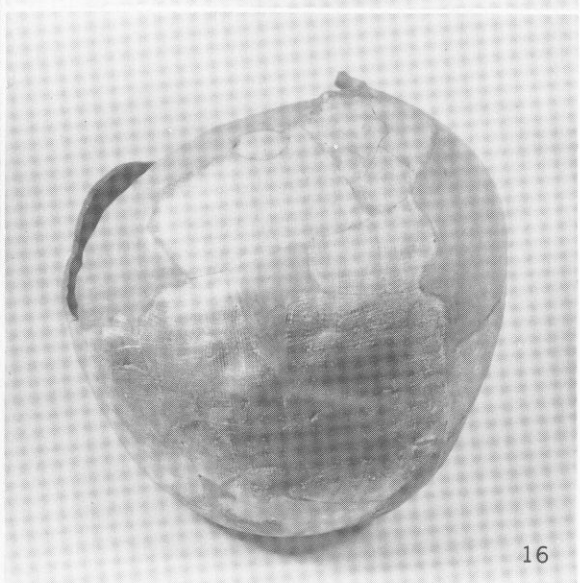
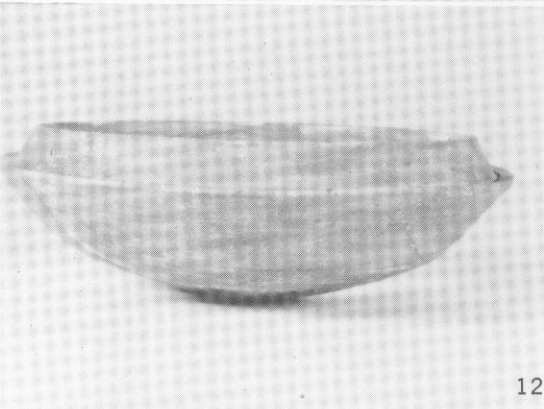
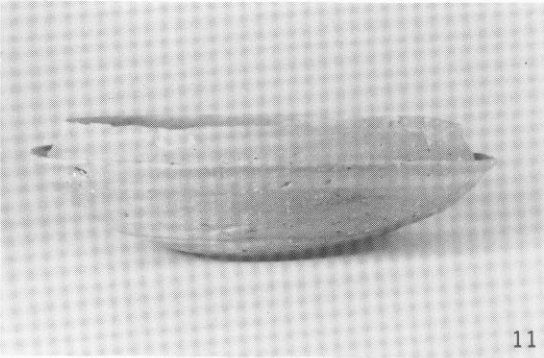


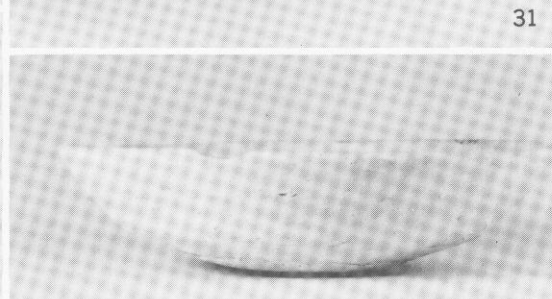
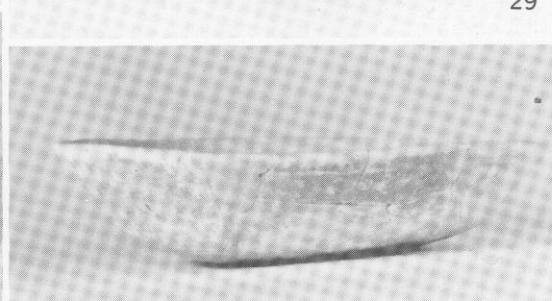
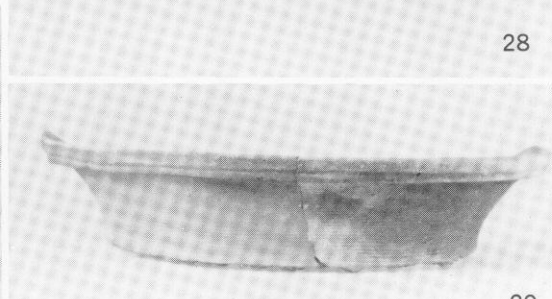
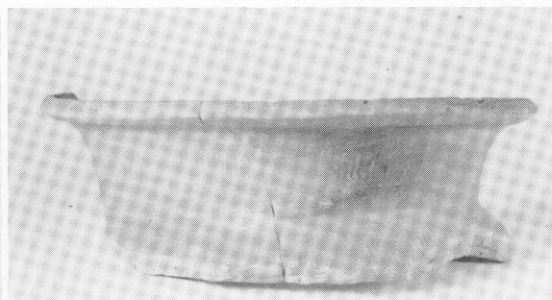
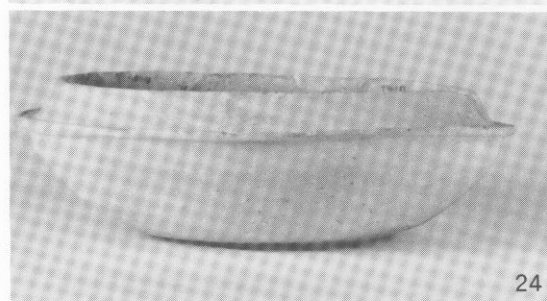
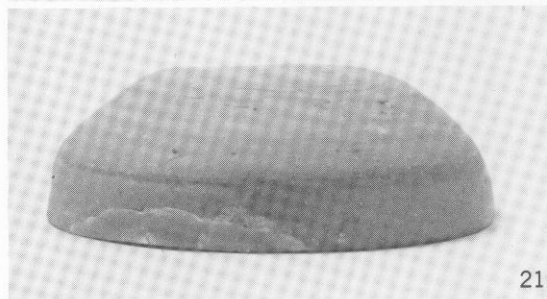
(1) SD01~SD04



(2) SB01







大野城市文化財調査報告書

第 18 集

昭和 61 年 3 月 31 日

発 行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2丁目2番1号

印 刷 栄光印刷株式会社
福岡市東区箱崎下入道800